Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-05-31

糸賀一雄の「生産性」をめぐる対話 : 領域横断による読み解き〈社会福祉学・重症児教育学・教育人間学・文化人類学〉

渡部, 昭男 ; 國本, 真吾 ; 金丸, 彰寿 ; 蜂谷, 俊隆 ; 垂髪, あかり ; 門前, 斐紀 ; NAKANO, Lynne ; 永岡, 美咲

(Citation)
日本教育学会大會研究発表要項,80:77-78

(Issue Date)
2021-08-16

(Resource Type)
research report

(Version)
Accepted Manuscript

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100476306

糸賀一雄の「生産性」をめぐる対話
—領域横断による読み解き〈社会福祉学･重症児教育学･教育人間学･文化人類学〉—

企画者・司会者：渡部昭男（大阪成蹊大学／元神戸大学／鳥取大学・名誉）
國本真吾（鳥取短期大学）、金丸彰寿（神戸松蔭女子学院大学）
報告者：〇蜂谷俊隆（美作大学）、〇垂髪あかり（神戸松蔭女子学院大学）、〇門前斐紀（金沢星稜大学）、〇Lynne NAKANO［翻訳：永岡美咲］（香港中文大学）

日本教育学会近畿地区主催のオンライン企画「糸賀一雄の思想と実践」（2021.3.30）では、糸賀一雄研究会著『糸賀一雄研究の新展開 ひとと生まれて人間となる』（三学出版 2021）に執筆した 3 名にご登壇いただき、文化人類学、社会福祉学・福祉社会学、憲法学からの読み解きを進めた。そこで出された重要テーマ「可能力」「ケア」「生産性」「共生」「尊厳」などの内から、今回は特に「生産性」に焦点をあて、執筆者 4 名による領域横断の読み解きと対話をさらに一歩深めたい。

１．社会福祉原理としての重症児の生産性：蜂谷俊隆

福祉実践では、人権を基盤におき、当事者の生活の維持を手段として、その人生がより良いものとなることが目指される。つまり、施設やサービスは手段であり、そこに方向性を与える理念や思想が不可欠である。糸賀は、重症心身障害児施設の実現過程において、「重症児の生産性」という概念を提出した。この概念は、どんなに重い障害があっても「人間と生まれて、その人なりの人間となっていく、自己実現をしているのだ」ということを意味する。しかも、そのような生産性を認め合う社会が、重症心身障害児の働きによって生産（実現）されるという二重の意味が含まれている。しかし、生産性という用語は、効率良く財貨を生む度合いを意味する。資本主義社会においては、財貨に交換できる労働能力（生産力）を備え、それによって独立自活できる存在が求められる。この前提に立てば、重症心身障害児は例外的存在として、一般社会とは異なる原理による保護の対象となる。糸賀が苦心したのは、重症心身障害児への社会保障を実現する論拠と、人間存在の例外としないことを原理的に両立させることである。その方法の一つとして、生産の意味を拡張することによって全ての人間には「生産性」があるとして、重症心身障害児から社会へのリベートを確保した。同時に、社会が囚われている生産力で規定された人間観から、人間の多様な営みの意味を取り返すことを、ラディカルに問いかけたのである。

２．同時期に語られた２つの言葉、「横（横軸）の発達」と「重症児の生産性」：垂髪あかり

「横（横軸）の発達」と「重症児の生産性」には共通点がいくつかある。第 1 に、糸賀が同時期に両者を語り始めること。第 2 に、両者を語り出すにあたって、糸賀自らが価値の転換をくぐること。第 3 に、両者を語る際、糸賀は「自己実現」という言葉を出すことである。1 点目について、「横（横軸）の発達」、「重症児の生産性」を糸賀が語り出すのは 1966 年である。これは、重症児への療育を始動したびわこ学園（重症心身障害児施設，1963 年）が、療育の方向性を見出し、第一びわこ学園と第二びわこ学園に分設する時期である。2 点目について、「発達」および「生産」について、糸賀は、近江学園での実践を開始した 1940 年代後半～1950 年代前半に持っていた自らの考え方を、1950 年代後半から 1960 年代の近江学園・びわこ学園の実践を経て、見事に転換させていくのである。3 点目について、糸賀は「この子らはどんなに重い障害をもっていても、だれ

ととりかえることもできない個性的な自己実現をしている」「人間とうまれて、その人なりの人間となっていく」「その自己実現こそが創造であり、生産である」と言う。「横（横軸）の発達」「重症児の生産性」が「自己実現」という言葉により、結びつくのである。重症児と向き合い、自らの価値の転換（自分自身との「対決」）を果たし、1960 年代という時代にあって、重症児の「自己実現」のあり方を社会に提起するために、２つの言葉はどうしても必要だったのである。

３．京都学派教育学から読み解く「生産性」: 門前斐紀

本報告では、糸賀において「個性的な自己実現」の道行を指す「（重症児の）生産性」という言葉を、思想的な影響関係のあった京都学派の美学/教育学者・木村素衛(もともり)（1895～1946）の「形成性」論から読み解く。木村の「形成」概念は、思想の基軸となった「表現」と並ぶキーワードであるが、とりわけ教育を論じる際に焦点化されることが指摘されている。他者との関わりのうち、一定の意図性や計画性が必然に求められる教育の営みを探る鍵となった「形成」概念、引いては初期美学論考から思索を通底する「作ること」の哲学から、糸賀の「生産性」に関する記述を読み解くことが今回の目的である。第一の論点は、木村の「形成」論が身体性の議論と密接に関わる側面である。ここでは、「表現」を現し出す媒介としての身体の構造や、その技術性、道具性の作用について考察する。第二の論点は、そうした身体の「形成性」が現物の道具やモノと接し、連動し、環境に拡散する瞬間における、「作ること」と「作られること」の交叉拮抗のダイナミズムである。ここでは、木村の師である西田幾多郎（1870～1945）の身体論も参照し、人間が「身体的存在」として於いて在る「表現的世界」の側から「生産性」という事象を捉え返してみたい。以上の見通しの下に本報告は、療育記録映画「夜明け前の子どもたち」（1968 年）の各場面や、糸賀の言う「物をつくるということ」を通したコミュニケーションについて考察する。

４．「生産性」に関する糸賀一雄の思想とヌスバウムの西洋政治哲学の比較：Lynne Nakano

本報告では、資本主義社会の社会・文化・政治システムの基礎となる人間の「生産性」の位置づけについて、糸賀一雄と、シカゴ大学功労教授（法学・倫理学）のマーサ・C・ヌスバウムのアプローチを比較する。ヌスバウム（Frontiers of Justice: Disability, Nationality, Species Membership. Cambridge, MA: Harvard University Press, 2006）と糸賀（『この子らを世の光に：近江学園二十年の願い』日本放送出版協会 [1965] (2003)）の著書を読むと、生産性に重点を置くことで、社会の全ての人々に完全な権利とサポートを提供する社会を目指す取り組みが複雑になると、両者が認識していたことが分かる。ヌスバウムと糸賀は、それぞれ異なる視点から生産性に関する懸念にたどり着いたが、個人の人権を重視する自由主義社会における生産性については、両者とも温和なアプローチを採っていた。糸賀は、一生他人に頼る人にもその人の生き方があるため、「役に立つこと」の定義を拡げたほうがよいと考えた。ヌスバウムは、生産性は重要ではあるが、他人への依存、人間としてのニーズや弱さも本来、人間が経験する尊厳の一部であると主張した。ヌスバウムも糸賀も、本来、人間には思いやりの心が備わっていて、その思いやりは教育を通じて育てられ、思いやりと道徳に基づく人間の経験についての考え方の変化から、革新的で大規模な社会の変革につながると考えた。（謝辞：香港政府・大学教育資助委員会（University Grants Committee）研究資助局（Research Grants Council）（プロジェクト番号 14609818）の助成を受けた）